

ニシマカジキ 大西洋

White marlin, *Tetrapturus albidus*



管理・関係機関

大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)

漁業の特徴

本種を主対象として漁獲している漁業は米国、ベネズエラ、バハマ、ブラジル等のスポーツフィッシングとカリブ海諸国やアフリカ西岸諸国の沿岸零細漁業であるが、漁獲量の大部分は台湾、日本、ブラジル等のはえ縄漁業の混獲によるものである。近年、ベネズエラ、トリニダード・トバゴ等のカリブ海諸国やブラジルの零細漁業の漁獲の割合が多い。最近本種に外見が極めてよく似たラウンドスケールスピアフィッシュ (*roundscale spearfish, Tetrapturus georgii*) という新種の存在が確認され、ニシマカジキの報告漁獲量の中に本種の漁獲が含まれていることがわかった。現在までのところ ICCAT のニシマカジキの漁獲統計はこの 2 種と一緒に計上している。

生物学的特性

■体長・体重：200 cm (下顎-尾叉長) • 44 kg

■寿 命：不明

■成熟開始年齢：不明

■産卵期・産卵場：春、熱帯域

■索餌期・索餌場：夏、温帯域

■食 性：おそらく魚類、いか類

■捕食者：不明

※ 2006 年に本種に外見がよく似たラウンドスケールスピアフィッシュが新種として記載された。これ以前に行われた本種の生物学的研究には、ラウンドスケールスピアフィッシュの標本が混入していると考えられる。

漁獲の動向

本種の漁獲の大半ははえ縄漁業によるものであり、1980 年代半ば以降は南大西洋での漁獲が、北大西洋を上回っていたが、2010 年からは北大西洋の漁獲量がやや多くなっている。本種の総漁獲量は 1960 年代に約 5,000 トンまで達した後、1970 年代に 2,000 トン前後に急減し、2000 年までの間に 1,000 ~ 2,000 トンの間で推移した。その後総漁獲量は緩やかな減少傾向を示し、2009 年までは 600 トン前後で推移したが、2010 年以降再び減少し、2016 年は暫定値で 455 トンと報告されている。日本の漁獲量は、1990 年代前半までは 100 トンを上まわっていたが、それ以降減少を続け、近年では 6 ~ 40 トン前後であり、2016 年は 9 トンであった。

利用・用途

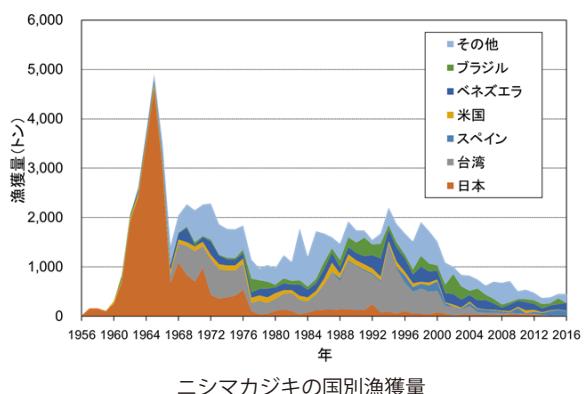
刺身、寿司、切り身 (ステーキ)、マリネ。

資源状態

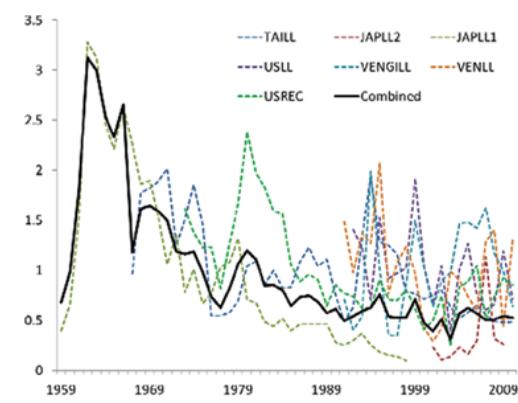
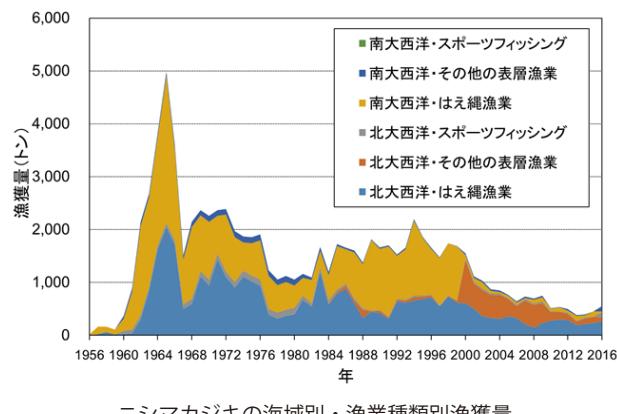
2012 年 5 月に ICCAT においてプロダクションモデルと統合モデルを用いて資源評価が行われた。資源はこれまで高い漁獲圧を受けてきたが、現在は漁獲圧も減少し、現在の漁獲死亡係数の水準は F_{MSY} よりも低くなっている可能性が高いが、資源量はいまだに B_{MSY} よりも低くなっていると考えられる。また、評価に用いた両モデルでは資源の生産性の推定値が異なり、後者の方が前者と比べて資源の回復が早いという結果になったが、現有の情報ではどちらの結果も同程度の確率で起こりうるとされた。これらの結果は、報告された漁獲量がニシマカジキの漁獲死亡を正しく反映している仮定によっているが、生存放流個体の死亡率が高かったと仮定した場合は、推定される資源状況は悲観的になり、現在でも過剰漁獲の状態にあることを示した。以上から、現在は漁獲圧も減少し乱獲は進行していない可能性が高いものの、資源は乱獲状態ではあることが示され、低位水準で微増傾向と判断された。



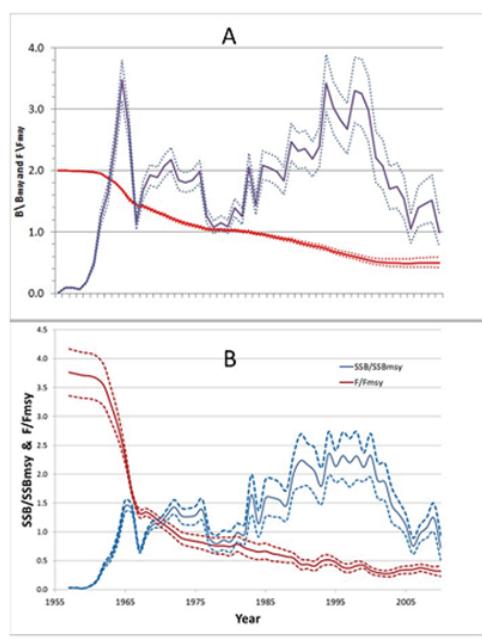
ニシマカジキの分布



管理方策	
<p>2012 年に行われた資源評価結果を受けて、大西洋のニシマカジキ資源に対しては、2013～2015 年の間の TAC を 400 トンとすることが合意された。日本の割当量は年間 35 トンである。また、割当量の消化が近づいた場合には、生きて漁獲された個体ができるだけ放流後の生存率が高くなるように放流することが勧告された。また、資源解析・評価の実施に当たって問題となった、生存放流及び死亡投棄個体数の推定方法の報告、スポーツフィッシングについてはオブザーバーの乗船（カバー率 5%）、サイズ規制と売買の禁止が勧告されている。2015 年の ICCAT では、2016～2018 年の各年の TAC を引き続き 400 トンとすることが合意されるとともに、放流後の死亡率を最小化するよう取り組むことが勧告された。</p>	



破線は個々の資源量指数を、黒実線はそれらを 1 つに併せた資源量指数を示す。



* 漁獲量には、いずれもラウンドスケールスピアファッシュの漁獲が混入していると考えられる。